
R-TYPE story

BYDO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R - T Y P E s t o r y

【Nコード】

N 7 6 2 3 P

【作者名】

B Y D O

【あらすじ】

R - T Y P E の話を独自設定をこめて膨らませた物です。少しオリジナルが入っております。そして、R - T Y P E より残酷です。なので、R 1 5 にしてあります。

この小説はR - T Y P E を元にした話です。事実とは違う部分があるので、注意してください。

BYDO

それは、突然やってきた……

それは、人工的に造られたマモノ……

それは、26世紀の人類が送ったモノ……

始まりは小さな事だった。

木星ラボで製作中の戦艦の様子を調べるため、国の閣僚たちが乗った特別偵察艇が、何者かの手によって破壊されたのである。

地球政府はまずテロリストを疑った。しかし、この時代いくら技術が進んでると言ってもこの輸送機を破壊できるだけの射程を持つ兵器など無い。

それで、地球政府は別の要因を探った。反乱を起こされたかもしれないからだ。

しかし、この原因は意外にもすぐ見つかったのであった。

その理由はテロリストでもなく、反乱でもない。

いや、テロリスト、反乱の方がまだ良かったかもしれない。

これから、地球は暗い闇に閉ざされてしまうのだから。

その理由が分かったのは半年後の21世紀末期だった。

発見理由は、意外にも天王星が地球へ送った緊急メッセージだった。

「助けてくれ！ バケモノだ！ すぐ来てくれ！ すぐ来てくれ！

悪魔……」

メッセージは悪魔で途絶えた。

地球政府はただちに偵察艇を出し、調査を実施した所、奇妙な生物を発見したとの連絡が入った。

モノに寄生し、モノの姿形を変えて、破壊しまくる明らかに人以外のモノを見かけた。

その後、地球政府はこのバケモノを悪夢と名付け、人類に発表した。震えるもの、怖がるもの、人生を諦めるもの、BYDOとの共存を望むもの。

今の地球には、狂気に満ちていた。

BYDO（後書き）

「そんなことよりおなががすいたよ」
「ニホンカイハツヤマネ」の日記」

フォース

多くの人々は、BYDOの出現によって恐怖に震えるばかりだった。しかし、あの機関は違った……

Team R - TYPE チーム・アールタイプである。

その機関は、いかなる人々もひれ伏すほどの技術力を持っていた。大型戦艦にも対抗できるほどの威力を持つ波動砲、異次元ワープ技術などだ。

しかし……ある黒い噂がある。

噂によると、Team R - TYPEの本部からうめき声が聞こえるのだという。

それは、誰も信じなかった。いや、信じたくなかった。しかし、その噂は本当だったのだ。

Team R - TYPEの場所は地球連合軍しか知らない。しかし、あるTeam R - TYPEと関わってしまった人物が残したメモによってそれが明らかにされるのだから……

当然、Team R - TYPEのマッドサイエンティストがBYDOをそのまま見過ごす理由はないだろう。

BYDOを利用し、BYDOを制す、それは聞こえは良いが、実際はただBYDOに依存しつつBYDOを制するという矛盾を抱えているのだ。

もちろん、そう主張しているTeam R - TYPEも知っているのだ。だが、それを隠蔽しつつある。

実は地球連合軍が勝とうがBYDOが地球を制圧しようが、マッドサイエンティストにとって関係ないのだから……

地球連合は、木星ラボに造らせていた戦艦の状態を確認する為に木星ラボと惑星間光通信で「製作状況を確認したい」連絡を送った。しかし、1日経っても木星ラボと連絡がつかないのである。

もう一度地球政府は連絡した。また連絡は来ない。

また連絡した。それでも連絡は来ない。

もう諦めつつ連絡した。やっぱり連絡は来ない。

いつBYDOに汚染されてもおかしくない、そう考えた地球連合は木星ラボへ偵察艇を出した。

しかし、そこにあつたのは焦げた戦艦、大きなクレーターができた木星、もう面影すら残っていない木星ラボの従業員だけだった。

爆発の中心には、超束積高エネルギー生命体、BYDOの切れ端がただよっていただけだった。

偵察艇の乗組員たちは、なにかの資料になるかもしれないと、残骸にあつたそれを偵察艇の倉庫に運び込んだ。

BYDOに汚染するかもしれない、その事よりも偵察艇の乗組員たちはBYDOが持つ可能性を求めたのだ。

しかし、火星付近まで輸送した時、地球連合はBYDOによる汚染を恐れて、BYDOの輸送を中止させた。

偵察艇の乗組員たちは絶望した。自分たちが汚染するという危険性を孕んでまで輸送したのに、汚染の危険性の為に自分たちの成果が犠牲になったのだから。

だが、後、ある機関から連絡があつた。

「Team R-TYPEからの連絡だ。そのBYDOの切れ端を運んで欲しい。お前たちの成果を有効に生かしてやろう。こちらからも輸送艦を送っている。火星で一旦待機してほしい」

Team R-TYPEは、爆発の原因をBYDOの切れ端と判定し、すぐさま火星に輸送艇を送り込んだ。

偵察機がついた頃には、もう輸送艦は到着していた。

「すげえ……これがTeam R-TYPEの技術力か……地球連

合軍とは違うな……」

「もちろん、我々は宇宙一の科学者ですからね」

Team R-TYPEの職員は、輸送艦に乗組員ごと偵察機を丸ごと入れ、地球のTeam R-TYPE本部へ輸送艦を移動させた。

その速度、わずか30分。

輸送機が木星までたどり着くための時間が3日だから、距離に差はあるけれど、その速度の違いが分かるだろう。

Team R-TYPEに輸送されたBYDOは、半分は培養され半分は実験に使われた。

そして、実験に使われた半分のから作られたものは2つある。まず1つ目は、コントロールロッドを打ち込む事で作られたフォー

ス。

2つ目は、実験段階で作られた人造フォース、ビットである。しかし、ビットはともかくフォースについてはTeam R-TYPEは何も知らなかった。

それが、ある大惨事を引き起こす事になってしまうのだ……

Team R-TYPEたちはついにルピコン川を渡り、BYDOを利用した兵器を創ってしまったのである。

「みんなでルピコン川を渡れば、楽園が待っているよ。みんなであー！」

Team R-TYPE職員のメモより

語られぬ真実

フォース……開けてはいけない、パンドラの箱。それは不幸を放ち、かすかな幸福のみを残す。その幸福のために何人もの人が犠牲になったかは分かっていない。

Team R-TYPEは、フォースを利用した戦闘機《新たなる狂気》を開発していた。

基本的な設計は、Team R-TYPE主催のRXプロジェクト（宇宙空間機動計画 機体開発プロジェクトの計画名）に加入する3社と連合で話し合う事にした。

その結果、以前からRX-プロジェクトに加入しているアイレー・ムー エンジニアリング社製作のR型汎用機（作業用の機体）を流用し、それにフォースをつける設計になった。

フォース固定技術はアイレー・ムー社の親会社のEIZO770システム社が担当した。

残りの1社は、後でTeam R-TYPEすら触れていない狂気へ踏み込む事となる。

しかし、この兵器については民衆からフォースについての危険性を指摘する声があったが、Team R-TYPEは

「ならテストをすれば良いじゃないか。今なら特別にテスト用にミコヤン・グレゴビッチ大佐以外には誰も触れていないスペシャル試験機、R-7を使うぞ。これで良いだろ」

と答えた。

実験に使う試験機R-7は、Team R-TYPEの最高の技術力をもって開発された、異層次元航行能力（違う次元にワープする機能）、波動砲（波動エネルギーを貯め、放出するタイプの波動砲。機体前方に貯める貯め、銃身はいらない）を備えた機体であったが、ある2つの欠点があったのだ。

1つ目は、価格の問題だ。普通の戦闘機の約100倍もする超高価な機体なのだ。

それは無理がないだろう。普通の戦闘機で戦艦とまで匹敵する位の性能なのだから。

そして、2つ目は速度の問題である。

この戦闘機は、普通の戦闘機より約4倍も早いのだが、フォースを使うのにはまだ速度が遅すぎたのであった。

この欠点が、フォースを使用する時に大問題となってしまうたのである。

Team R-TYPEの者は、新技術の為には犠牲も惜しまない。だから、大佐くらいの者ならいくらでも捨てるだろう。何しろ、【キボウ】に満ちているから。

「ミコヤン・グレゴビッチ大佐様、Team R-TYPEの者だが、実験のために来てもらいたい」

Team R-TYPEの職員が馬鹿にしたような感じで大佐に向かって話しかける。

「断る！ BYDOを兵器に使うような外道のTeam R-TYPEのために協力などしたくない！」

「……あなたの事を地球政府に密告しますよ？」

実は、完璧だと思われた大佐も弱みがあった。彼は、6年前の軍事クーデターのスパイで、地球政府の情報を影で流していたのだ。普通なら銃殺刑になっているだろうが、運良く生き延びたのであった。そのクーデターは1ヶ月で鎮圧され、クーデター参加者は良くてあの木星ラボで強制労働、悪くて銃殺刑となった。

もちろん、今クーデターに関わって生きているのは大佐だけであっ

た。

中には彼の行為を密告した一般兵もいるが、地球政府は彼を信用してたので、一般兵の言葉に耳を貸しはしなかった。

しかし、Team R-TYPE R-TYPEみたいな大きな機関の言葉なら耳を貸すだろう。

実は、Team R-TYPEはその事を知っていたのである。

Team R-TYPEにとってみれば大佐を今密告したって何の被害も受けない。むしろスパイを発見したとして英雄になれるだろう。しかし、Team R-TYPEはこのことをちらつかせ大佐を利用したのである。

「う、うむ……しかし、後の事は……もし、私が反逆者だと皆に知れ渡ってしまったら……」

「心配いりませんよ、後の事はこちら側で処分しますから」

「う……分かった、協力する」

弱みを握られた大佐は、外道と協力するしか道が無かったのである。
「分かりました。では、明日の午後8時にTeam R-TYPE実験場入り口に来て下さいね。くれぐれも、逃げ出さないように」
Team R-TYPEの職員はあざ笑うかのような目で彼を見た。

次の日の午後8時10分前、大佐はTeam R-TYPEの実験場入り口で意識を失いかけつつ立っていた。

「助けてくれえ！ バケモノだ！」

「いやだ！ いやだ！ いやだ！」

「いてえよー！ つれえよー！」

「ぐがああああああ！」

それは無理もない、何しろ実験場から悲鳴やうめき声が聞こえるのだから逃げたくなるだろう。

しかし、大佐は反逆者として殺される不名誉よりも、事故で死ぬ事

を選んだのだ。

大佐は、自らに待ち受ける運命を察し、ポケット内のメモ張にメモを書いた。

5分後、Team R-TYPEの職員が出てきて、彼を地獄の実験場の中へ通した。

「怖いですか？ 反逆者さん。まあどの道死ぬんだから諦めな」

職員の嫌味な言葉に、抵抗もできずに彼はただ案内されるままに歩いただけだった。

「いぎやあああああ！」

「うぎいいいいいい！」

防音設備でさえ防げないうめき声。

大佐は、Team R-TYPEという狂気に立ち向かえないでいた。

フォース実験場へついたのはそれから5分後の事である。

フォース実験場には、一機のフォース用の改造型R-7とフォースがあつた。

「アッハッハッハ、大佐さんも実験台にまで堕ちるとはねえ。あ、今脱出しても良いけどよ、今ここで死ぬか後で銃殺刑になって殺されるのかどっちが良いか？ アッハッハッハ、大佐さんなら名誉を選ぶんだろうな、アッハッハッハ」

狂気に逆らえない……クーデターに協力したような大佐にとってはこれほど辛いものもないだろう。しかし、今逆らえば反逆者として処刑されるだろう。それは、大佐にとって実験台になるより辛い事なのだ。

「さあて、早速乗ってくれないかね？」

大佐は、R-7という棺桶に乗った。

大佐はもう自分が死ぬ事は分かっていたのだ。ただ、どう死ぬかが分からないだけであつた。

もう使い慣れた機体で死ぬ事を、大佐はどう思ったのだろうか。

「フォースを開放する。すぐ装着してくれ」

実験場の地上から、一つの狂気がR-7へ向かって飛んでいった。

「フォース、順調である」

フォースは、R-7と順調に接触すると思われたのだが……

フォースとR-7との接触不良によりR-7が爆破し。轟くような音が響いた。

大佐はフォースの激突により頭が砕け、脳は圧力で潰された。腹は砕け、橙色の内蔵がとび出た。手足はもう粉砕骨折してしまって面影すらない。コックピットを血と内蔵で染めた。

後、波動エネルギーの爆発によりR-7の周りを青光の球が包んだ。そして、R-7は完全に消えてしまった。

おそらく、蒸発してしまったのだろう。

当然、生きている可能性などない。

Team R-TYPEは、この結果を「R-7の速度不足、高速エンジンを搭載すべき」とだけ報告した。

「Team R-TYPEは【キボウ】に満ちている。キボウのキは狂気のキ、ボは暴拳のボ、ウはうめき声のウだ」

「大佐が残したメモ書きより」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7623p/>

R-TYPE story

2010年12月31日19時10分発行